



これから社会に巣立つ君たちへ

児童養護施設 和進館児童ホーム
施設長 長谷川 晃久

『長谷川さん、ようやく〇〇での就職が決まったよ。いろいろありがとう……』
巣立った後、なかなか一定の職場で安定することなく地域を転々とし、時として「東京でホストをやっている」と語っていた彼。

自分がやりたい仕事、好きな仕事を選択し彼なりに頑張っていたことは否定しない。

しかし、送り出した職員としては「もう少し自分の体調面を労われる職種を選択してくれないものか……」と心配ばかりが募る。

そんな彼がようやく「今のままではいかん」と感じたのであろう。

ある日突然

「普通の仕事に就きたい。で、自分で探してみただけど、採用には誰かが緊急連絡先として引き受けてくれないといけない。ごめん、長谷川さんになってくれない？」

「あっ、あと賃貸物件の緊急連絡先も！」と連絡してきた。

……お安い御用である。

さすがに『身元保証人』となると「ちょっと考えさせろ」と時間をもらうが、『緊急連絡先』になるぐらいで安定した職に就いてくれるなら、願ったりかなったりである。

即答でOKを出した結果が冒頭の彼からの言葉。

巣立ち後の君たちからの連絡は、圧倒的に『突然』が多い。

「結婚することになったあー」「子どもができたよー」とハッピーな連絡があれば、

「もう俺あかんわー」「〇〇が大変なことになっててさあー」とネガティブな連絡もある。

私たち職員にとっては内容がどうであれ、君たちからの連絡は大変嬉しいものである。

なぜなら君たちの声、君たちの姿が職員にとっての振り返りや、達成感に繋がったり、これからの活力になるからである。

そして、何より月並みだが、「ああ、良かった……なんだかんだあるけど、社会と向き合って頑張ってるじゃないか」と胸をなでおろすことができるからである。

遠慮することはない。巣立った君たちが社会で、何枚もの分厚い壁にぶち当たるだろう事ぐらいは想定済みである。

そんな時には決して孤独感を感じず、一人で抱え込まないようにして欲しい。

巣立った場所の職員を頼って話をすればいい。

この冊子に載っているように、道しるべを照らしてくれる人たちを頼ればいい。

一緒に少しずつ壁を砕きながら、年をとろう。

私は、君たちが帰ってきたときに、君たちのことをよく知っている職員が一人でも多く「お帰り……」と迎えてあげられるように頑張る。

君たちには「いざとなったら、帰って相談するかあ……」ぐらいで社会と向き合って欲しい。育った場所に遠慮はいらない。